

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On The Confessions of Nat Turner by W. Styron : the historical facts and fiction

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1969-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤松, 光雄, Akamatsu, M. メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2119

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



W. スタイロンの小説

「ナット・ターナーの告白」

— 史実と虚構の間 —

赤 松 光 雄

Remember Denmark Vesey of Charleston; Remember Nathaniel
Turner of South Hampton... who followed noble John Brown
and fell glorious martyrs for the cause of slave.

Frederick Douglass, March 21, 1863.

I

小説 *The Confessions of Nat Turner* (1967, 「ナット・ターナーの告白」) の著者 William Styron は1925年生まれのアメ리카作家である。南部 Virginia 州の港町 Newport News に生まれ、そこに育った。North Carolina 州 Duke 大学を卒業後、New York's New School にて創作を学び、処女作 *Lie Down in Darkness* (1951, 「闇の中に横たわれ」) を書き、Virginia 州の没落してゆく一家の姿を描いた。この長編小説で直ちに重要な新進作家として位置づけられるに至ったようであるが、そのほか *The Long March* (1956 「長い行軍」), *Set This House on Fire* (1960, 「この館に火を付けろ」) などの小説を執筆している。主題と手法において、William Faulkner, James Joyce の影響を濃くとどめ、さらに Thomas Wolfe からも影響を受けているといわれている。

この小説の主人公 Nat Turner は、アメリカの三大黒人奴隷叛乱事件の主謀者として、Gabriel Posser (1800年叛乱), Denmark Vesey (1822年叛乱) と

並び知られる歴史上の人物である。Nat Turner に関する事実の大部分は謎に包まれたままである。そこで Nat に関する史実として Nat の今日明らかにされている事実を簡単にのべよう。Nat Turner は奇しくも、Gabriel Posser の叛乱が起こり、Denmark Vesey が自由の身になり、John Brown が生まれた1800年10月20日、Virginia 州 Southampton 郡に Benjamin Turner の奴隷の子に生まれた。奴隷としては殊のほか恵まれた環境に育った彼は、幼くして読み書きを覚え、聖書を学び、宗教文学にふれた。また紙・火薬・陶器などの製法を身につけたといわれる。「葉に血のしたたり落ち」、「黒白の魂が激しく交戦する」などの神のしるしを見て、＜エジプトの子供たち＞を奴隷から導いて解放しようと蜂起を決意し、奴隷の Henry Porter, Hark Travis, Nelson Williams, Samuel Francis, Jack Reese らを指揮者として、1831年7月4日独立記念日に決起しようとした。だが折悪く病気にかかり、延期して別の神託を待った。8月13日太陽が「奇妙な緑がかった青色」に変わるのを見、8月21日に計画を遂行し、まず主人の Joseph Travis とその家族を殺害、計画通りマスケット銃、おの、かまを手に入れ、事を起こしてから40時間以内に55人～65人の白人を殺害した。ここまでは成功で、一団は48時間後に自由黒人(free Negro)をふくめ60人～80人にふくれ上がったが、聖都と同名の郡都Jerusalem (現在の郡都 Courtland) へ攻め入ろうとする途中、圧倒的な武装隊に遭遇し、武器・弾薬の乏しさのため叛乱軍はちりぢりになり、その翌日の攻撃で鎮圧された。蜂起に加わった17人(11人～19人?)の黒人が絞首刑になった。Nat 自身は最初軍をひきいて援軍を待つ予定であった Dismal Swamp へ一人でのがれ再起にかけたが、ある奴隷に隠れ場を密告され、同年10月30日に捕えられた。彼は獄の中で弁護人の Thomas R. Gray という人物に「完全に、且つ、自発的に、告白」したが、Gray はそれを書き取って20ページ余りの小冊子にして出版し *The Confessions of Nat Turner* (Baltimore, 1831) と名付けた。筆者が今 Nat の史実を書いているのも、主としてその本をもとにしている。Nat は11月5日にはもう絞

首刑の宣告を下され、同月11日に Jerusalem で刑を執行された。彼の叛乱のニュースにアメリカ全土が激しい衝撃をうけ、全南部は恐慌におびえた。彼が逃げまわっているうちは、奴隷暴動の流言蜚語が飛び交い、一方では黒人奴隷への報復の残虐行為が後を絶たずという有様であった。奴隷への弾圧対策はこれを機にますます厳しくなり、彼らに対する教育の厳禁、旅行・集会などの制限も一段と強化されることになった。

作者 Styron が幼少時代を過ごした Newport News から Southampton 郡の Nat Turner の叛乱のあったあたりまではわずか70キロの地点である。小学生のころ歴史の本で Nat のことを読んでいらい、作者の頭にこの事件がしみついて離れず、Duke 大学を出て New York に行った時も処女作に描きたい素材であったようだ。アメリカ奴隷制の歴史に並々ならぬ関心を抱きながら、20年余りの間、心にあたためたのち、やっとペンをとったのである。アメリカ社会を毎年のようにおそう大規模な黒人暴動が作者の創作欲を一層あふり立てたと思われるが、この社会的要因が同書の売れ行きを大幅に伸ばしたことは想像に難くない。Random House から出版されるや、たちまち創作部門のベストセラーにのし上がり、かなり長期にわたってその筆頭を占めたと記憶する。そして1968年、Pulitzer Prize 受賞の栄に輝き、黒人作家 James Baldwin も激賞した作品である。

Styron はわずか20頁ばかりの前述した Gray の *The Confessions of Nat Turner* を420頁の大部の小説に仕上げた。その題名をやはり *The Confessions of Nat Turner* と名付け、Gray が自らの小冊子に附したまえがき '*To the Public*' までそっくりそのまま小説の前文として掲載するという体裁をとっている。読者は当然 Nat Turner の叛乱を扱った歴史小説だと想像するであろうが、作者はこれを否定して序文の '*Author's Note*' のなかで、その創作意図をこう語っている。「私は Nat Turner と彼が指揮した叛乱について知られている事実から殆んどそれないようにつとめた。けれども彼の幼少時代や叛乱の動機など、Nat に関し殆んど未詳の領域において、私は事件の再構成の上で、

自由に想像力を駆使した。恐らく読者はこの物語から教訓を汲み取りたいと思うであろうが、私自身の意図は人と時代を再び創造し、常識的な意味での歴史小説ではなく、歴史に関する省察である作品を生み出すことであった」

II

Styron の *The Confessions of Nat Turner* は、叛乱が鎮圧されて捕えられ、裁判で死刑の宣告をうける前後の Nat Turner が、Jerusalem の獄舎の独房で生涯を回顧するという一人称の自伝小説の形をとっている。こうした状況も Gray の同名の書と同じである。本書は四章から成っている。

第一章は「審判の日」(Judgment Day)、獄中寒さと空腹と徒労感におそわれ、叛乱後は神を祈ることもできず、聖書のさし入れも許されないで絶望の淵に沈んでいる Nat のもとへ、*The Confessions of Nat Turner* を書き取った弁護士 T. R. Gray が法廷で‘告白書’を朗読する必要上、Nat に疑問点を正し、事項を修正し、かつ Nat の署名を求めにやって来るという設定で、Gray の役割は Nat の潜在意識の断想を次々に点滅させてゆくことである。

入江にボートを浮かべ漕いでいると、遙かの岬に高くそびえるおぼろな白い塔——いつも見る白昼のビジョン。私の頭から離れない鬼のような仲間の Will の姿。さまざまなシーンが私の心をよぎってゆく。裁判で、Gray が‘告白書’を、朗読している。“I had been living with Mr. Joseph Travis, who was to me a kind master, and placed the great confidence in me; in fact, I had no cause to complain of his treatment to me!” 「このやさしい主人でさえ、お前は残酷にも殺害してしまったのだ。そのわけを云え」と私にせまる Gray。‘告白書’にも打ち明けられない Gray にも語れない秘密……それが新たなナット・ターナーの告白」のなかで、私は自分から心の窓を開こうとしているのである。

ちらっと白人娘 Margaret への想いが頭をかすめる。「何十人の人間が殺

されたのに、指揮者のお前が一人しか殺さなかった、なぜだ？」それを聞いたとたん、私の空腹感は消え、心臓が早鐘を打つ。私の前につかまった Hark は隣の独房にいて、壁越しにときどき話しかけて来る。Hark は私の親友だ。私と同じ車輪製造業者の Joseph Travis の奴隷だが、前の奴隷主に妻子を Mississippi へ売られ、それからはショックで仕事の失敗が目立つようになったが、高所恐怖症の彼は罰としてはしごで木の上ののぼらされたものだ。「黒んぼはすぐ眠くなるというが、これは裁判に対する侮辱じゃないか」という声でハッと我にかえる。「55人の白人が恐ろしい死を迎えた……」むせ返る法廷に一人の女のかん高い悲鳴が緊迫した空気を破って長く長く伸びる。「Whitehead 家の美しい教養ある娘 Margaret もこの野獣の……」春の息吹きのようにやさしい Margaret は、二三カ月賃貸しに出されていた時に知り合った娘であるが、屈託のないおしやべりや学校で習った詩の話などを週末に聞かせてくれ、聖書のお話をねだった。壁の向うから、「ナット、お前が逃げまわっている間、大変だったぞ、ずい分黒人が殺されたんだ、Sam と Nelson? 勇敢に死んだ、やつらは」薄闇に、浮き砂が首まで忍び寄り、5・6人の黒人の子が狂気の如く手を振るのだが、悲鳴とともに深く、深く、黒い手が、顔が沈んで行き、消える。「立て、ナット・ターナー！ 何か云いたいことは？」「何もありません」

第二章「過ぎ去った日々——声、夢、想い出」(Old Times Past——Voices, Dreams, Recollections) と、第三章「叛乱計画」(Study War) は、やはり獄中の回想録であるが、第一章と異なり、ほぼ物理的時間の経過にそい、第一章の断片的回想と幾らか二重写しに描きつつ、物語りは進行する。第二章は12才ごろから26・7才ぐらまでの時期、第三章はそれ以後、すなわち叛乱を思い立ってより決行までを取り扱っている。

Benjamin Turner の財産に生まれた私は、8・9才のころ彼の突然の死により、Samuel Turner の手に移った。黄金海岸の Coromantee 種族の女であった祖母がわずか13才で亡くなったのがかえって幸いし、主人のお屋敷で

働く house nigger として拾い上げられた黒人を母に持った。父も house nigger だったが、ある時主人の Benjamin と口論した末、どこかに逃げ去ったということだ。幼時から賢明で異常なほど知識に渴えていた私は、ある時主人の留守に書齋に忍び込み、J. Bunyan の *The Life and Death of Mr. Badman* を盗んだ。それが発覚したとき、奴隷が本を読むなど想像を絶することなので、かえってとがめも受けず、家族から算術や宗教などを教えられる黒い愛玩物になった。16才のころの私は Samuel 旦那の温情からその工場で大工の職を身につけさせてもらった。私は一家の末娘 Emmeline を慕うようになったが、彼女が白人と関係している声を聞き、Emmeline を包んでいた神秘の輝きは消えた。が、工房の隣りの倉庫で週一度のひそかな性の快楽には、彼女の幻影が私の頭にこびりついていた。

19才の春、当時の私の聖書の知識はすでに大抵の白人が到底及ばぬぐらい該博になっていた。同じ屋根の下の奴隷 Willis を弟のように可愛がり、信仰の道に引き入れていたが、春の終わりごろ Jerusalem の郊外のキャンプ・ミーティングと一緒に行くことを何よりの楽しみにしていた。ところが Willis は賃貸しに出すとだまされて南部の農園に売られ、それも不可能になった。主人に恨みをいうと、不況のせいで家運が傾き、お金があるのでどうしようもないという返事に、自分の身分への不安、主人への憎しみを感じた。21才になったら解放して自由にしてやるといった主人の約束もあやふやなまま、やがて私はあるバプティスト教会の牧師にあずけられる。ここでの生活は苦しく、夜明け前から真夜中まで働かされたあげくに、同性愛の牧師にしつこく云い寄られるしまつで、半ば人間、半ばけだものの生活が堪まらなくなり、200 マイルの道程を Pennsylvania まで逃亡することも考えたが、待てば自由になる可能性もなきにしもあらずと思い、踏みとどまった。ところが1822年、とうとう奴隷に売られ、Samuel 旦那への怒りはふっふっと煮えたぎった。やがて競売にかけられた私は、Jerusalem 近辺の粗野な男 Thomas Moore に買い取られる。

1926・7年ごろから白人に対する憎しみから Southampton 郡の白人を皆殺しにするという神の使命を信じるに至った。25年から26年に長期の大干ばつが当地をおそい、野菜、穀物に甚大な被害を出した。自由黒人で飢え死しかかった者も多数いたが、森の中での五日間の断食中、私は黒い翼の天使が白い翼の天使と剣と盾をもって相争う啓示を得た。それに飢え死に寸前の家族を抱えた自由黒人 Isham が Moore 旦那に面と向かって悪しざまにののしったのに、主人の方が真青になって逃げ出した事件も、私に強烈な印象を残した。土曜の昼下がりに、奴隷主たちは黒人をつれ Jerusalem の市に三三五五集い寄るが、のちに私と共に起ち上がった Sam と Will が非情な主人の命令で衆人環視のなかでなぐり合いをやらされるのを聞いて、「私たちは人間だ、誇りを持って」とまわりをいた黒人たちに始めて説教をした。それがきっかけで私は Reverend (牧師) と呼ばれ、いつも7・8人を集めバイブル・クラスを開くようになり、やがて叛乱計画へと発展したのである。

私は賃貸しに出された先の Whitehead 家の書齋でテーブルを修理するふりを装い、Southampton の地図を拡げ計画をねった——初段階で馬・銃・弾薬の豊富な Whitehead 宅をおそう。広い道を避けS字形に迂回しながら、兵器廠占拠を目標に聖地 Jerusalem に進軍する。沿道の23の屋敷・農場・農園に住む白人は、老若男女を問わず殺す。この頃には現状に不満をもった黒人がぞくぞく加わり、叛乱軍は数百人にふくれるであろう。次に食糧の豊かな湖 Dismal Swamp に着き、南部中の黒人がこの壮大な神のいくさに参集するを待つ。指揮は Hark, Nelson, Henry, Sam にとらせる。

奴隷主の Moore が不慮の死にあい、私は Joseph Travis の手に移った。主人の許可をえて又森へ断食に出かけた私は、三日目に皆既日蝕に出会ったが、その後狂おしい肉欲に翻弄された。やって来た Hark らに、神は日蝕の形で現われ給い、御霊は私に「蛇とたたかうようお命じになった」と告げる。皮肉の意味もこめて最も騒がしい祭日、独立記念品を壮拳決行の日と決めたが、この年に限って郊外でのキャンプ・ミーティングが開かれなくなったた

めに予定を変更せざるを得なくなり、次の機会を待つうち、Jerusalem の人口の約半分までが参加するというバプテイスト教会のキャンプ・ミーティングが郊外で開かれる 8 月 21 日に決定した。

その夜集合場所の谷間に出かけた私は、全員がかなり酔っぱらっているのを見て叱りつけた。静かに一列縦隊で森を出、綿花畑に入り、主家 Travis の屋敷に忍び込む。私の狙ったまさかりが二度とも主人からはずれ、かわりに Will が殺してしまう。Will はそばの女主人を犯し、その首をはねる。こうして次々に白人屋敷に闇討ちをかける。

再び牢獄の中。吹き入る 11 月の風はくるぶしに冷たく、鎖は感覚を鈍くする。Gray のことばがひびく。「罪もない赤ん坊や子供まで殺しておって。千人も集まるなんて、たった 75 人ぎりしかついで来なかったじゃないか。それも肝腎な時に酔っ払ってしまったんだぞ。お前らは革命なんか縁のない人種だ」人を殺せない私に代って何人も殺した Will がすっかりみんなの英雄として注目を浴びていた。Margaret が逃げるのが目に入った。「お前がやらなきゃ、おれにくれるか？」と Will のせき立てる声に追われ、私は最初で最後の殺人に愛する人を殺してしまった。

第四章「事はおわりぬ」(It Is Done...) は刑の執行までもう間もないひと時。あの浜辺に突き出た岬上の真白い塔。Gray が私の熱望していた聖書をやっと手渡してくれる。Margaret への思慕が私を燃え立たせ、身をゆだねる。Hark が執行場へ引かれて行く。私の名前が呼ばれた。彼女は私のすぐそばにいる。天国の輝きでお互いに愛し合おう。私はついに神を彼女に見たのだ。

III

Gray の *The Confessions of Nat Turner* をもとにこの大作に発展させた作者の豊かな想像力は驚くべきものがあり、生粋の南部人である作者が故郷 Virginia 州の四季おりおりの美しい風景や、動植物の愛情こもった描写に見

せる筆の冴えなどはすばらしい。だが小稿ではそういったことを扱わない。およそ非文学的な試みであるかも知れないが、Styron のこの小説を Gray の *The Confessions of Nat Turner* と比較対照し、又 Nat Turner とその叛乱の史実に関し、最も学問的に権威ある書と思われる *Nat Turner's Slave Rebellion* と比較しながら検討し、Styron のこの作品の意味を側面から探ってみよう。以下便宜上、Gray の *The Confessions of Nat Turner* は“Gray's,” Styron の小説の方は“Styron's”と略記する。

作者も云っているように、彼の小説は具体的な史実が明らかな点については、原本の“Gray's”の記載事実にかなり忠実に即していると思われる。作者は創作にあたって恐らく“Gray's”のほか、著名な William Sidney Drewry の *The Southampton Insurrections* (Washington, 1900)、それに Aptheker の *Nat Turner's Slave Rebellion* なども参照したと推察される。この小説のなかで“Gray's”はさまざまな形で登場する。Gray をして生のまま Nat に読み聞かせたり、裁判長が読み上げたり、或いはエピソードに取り上げたりして巧みに物語に導入しているのである。

“Styron's”がどの程度史実に基づいているか、少しその例をあげると *Nat Turner's Slave Rebellion* (以下便宜上“Rebellion”と略記する)に1810年、20年、30年当時の Southampton 郡における白人、黒人奴隷、自由黒人の人口をしるしているが、1830年では白人6,573、自由黒人1,745、黒人奴隷7,756の数字である (p. 15)。“Styron's”では、Southampton の8,000の黒人のうち、1,500人が自由黒人であると Gray に云わせ (p. 396)、また Nat の思案では黒・白の人口比を6 : 4 とふませている (p. 330)。また奴隷の価格は

(1) いろいろな版で出ているが、筆者の手許にあるのは Herbert Aptheker 著 *Documentary History of Negro People* と *Nat Turner's Slave Rebellion* に収録されている二つだが、前者は full text の約半分の量の抜粋なので後者を参照する。

(2) Aptheker の奴隷叛乱を扱った本書と、同じ著者による *American Negro Slave Revolts* 以外にはこの際の参照に足るものは出ていないようである。

(3) 著者 Aptheker はその序文で、本書は彼の1937年2月提出の Columbia 大学の修士論文であり、上梓されたのは30年後の1966年だが、その間大学の図書館で数多くの研究者に読まれてきたとのべている。

“Rebellion”によると、Virginia州で元気な field hand の場合1825年には不況で400ドルの底値にまで落ち、1829年まではそのあたりの価格をつづけた(p. 9)と記載されているが、“Styron’s”は奴隷一人(正確な時代・場所は示さず)当たり400ドルから600ドルの値打ち(p. 222)と書き、house Negroである主人公は1822年Virginia州Sussex Courthouseの村で460ドルで奴隷に売られている。蜂起の直前Mrs. WhiteheadからNatは気に入られ1,000ドルも出してNatを買いたい、Natの主人が売ってくれないとこぼしている。本書に登場する白人側の諸人物は“Gray’s”の末尾に付された犠牲者名簿の姓名と殆んど一致し、主要な黒人人物も“Rebellion”の巻尾の裁判にかけられた黒人名に入っている。1825年から29年にかけて東部大西洋の沿岸地域一帯が不況におそわれたことも、“Styron’s”の時代背景として、Natの所有主のTurner家、その他の奴隷主、自由黒人の生活環境の変化などにうまく採用され、また当時Virginia州が以南の南部諸州の奴隷供給州であった事実も、例えば、Natを路上で売られて行く鎖につながれた奴隷に会わせる話、奴隷たちが死ぬほど南部諸州の名を怖れている話、衰運に見舞われた白人がVirginia州の最大の特産物を‘黒人の子供だ’といったりする話で取り入れている。1840年のSouthampton郡は豚、綿花、果物の産額で州の第一位を占め、Southampton ciderというりんご酒が重要産物であった点も、“Styron’s”の内容と矛盾していない。もちろんこれらは前述したようにStyronの歴史に寄せる関心と、彼の生まれ育った地的環境によるものであろう。

限られた紙面で“Gray’s”と“Styron’s”の事実の一致点を一つ一つ取りあげる余裕はないので、これぐらいにして、次に“Gray’s”とその他の資料で、史実とされている事実と反した作者の創作、史実でない純然たる作家の想像の領域における創作について、歴史的なNat像からいちぢるしく異なった点を見よう。

筆者がこの書物で最も関心を抱いたのは、Natにとってそもそも叛乱の動

機は何か、という点であった。作者は「純然たる想像の領域」と考える。果たしてそうであろうか。Aptheker は諸説を紹介し、結局は自由を求めての動機以外には考えられないと云う。このことは“Gray’s”⁽⁴⁾のなかの後述する Will の言によっても明白である。これに反し“Styron’s”では Nat, 或いは他の奴隷たちの自由への欲求が非常に弱い。本心では、自由への願いが欠如していると断言してもいい。側面からそれを証拠立てる事例を拾って見ると“Gray’s”では叛逆前に逃亡をくわだて30日間も逃げまわっているが神の使命を遂行するためわざわざ主家へ帰って来て、はたの奴隷を大いに驚かせ、かつあきれ返らせる記述があるが、“Styron’s”ではⅡでのべたように、自由への逃亡も考えるが、すぐ思い直してとどまっている。主人公が Richmond で働いて3年たったら自由にしてやるといわれ、考える箇所があるが、自由についての作者の基本的な考え方が露呈している。‘Thinking now of my mother’s words long ago, and still another fear: *Druther be a low cornfield nigger or dead than a free nigger. Dey sets a nigger free and only thing dat po’ soul gits to eat is what’s left over of de garbage after de skunks an’ dogs has et ...*’ (p.194) この文章でも明らかのように、自由に対する作者の態度は自由黒人の描き方に顕著に示されている。その一例は自分の奴隷を解放して贖罪しようとする一未亡人によって解放された奴隷 Arnold は、女主人からもらった100ドルを最初の一年で飲み尽し、乞食同然の暮らしをしている。そして ‘... he was still the incarnation of freedom, and such freedom was, as any fool could see, a stinking apparition of hopelessness and degradation.’ (p. 262) という。自由黒人 Isham (史実によれば蜂起に参加した) も経済的に人間以下の生活を強いられるように描かれ、自由黒人で経済的・道徳的に真当な暮らしをしている例は書かれていない。作者は主人公の親友

(4) “Rebellion”は①不明とするもの、②金銭、貴重品等の掠奪を目的とするもの、③自由を求めてのものに分類し、やはり③の結論に達している。その場合、abolitionist literature が影響を与えたと見る史家も、abolitionist literature と叛乱の間には関係が見られないとする史家もいるとし、文書を奴隷たちが入手したことはありうるかも知れないが、その証拠がない、といっている。(p. 42)

Hark が北極星を当てに北部へ逃亡しようとするエピソードを10ページにわたって (p. 277~286) 披露し, Richmond, Washington, Baltimore と云い知れぬ苦難の途を越え, 自由の彼岸まで到達し, さてクエーカー教会への道のある黒人に尋ねたところ, その黒人から裏切られたちまち奴隷に連れ戻された。実は6週間のあいだ Hark は同じところをぐるぐる回っていたという話は, はなはだ不自然であるとともに, すこぶる非同情的な筆致である。奴隷解放についての作者の立場は, 温情な主人 Samuel Turner の意見と同じ方向のようである。Turner は奴隷の即時解放などは彼らにとっても良くない。黒人は劣等であるから先ず教育によって彼らを向上させるのが先だ, というのである。黒人は不自由な自由を獲得するよりも, Paternalism のもとに奴隷であるほうが幸福であるという Proslavery 的な考えが作者の心情に存在している。

白人邸宅に住む当時の黒人エリートの Nat は黒人大衆をどう考えていたか。野良仕事をする field nigger について, ‘... who already I have come to think of as a lower order of people—a ragtag mob, coarse, raucous, clownish, uncouth.’ (p. 136) と考える。home Negro の field Negro に対する優越感は Franklin Frazier にも認めているところであるが, “Styron’s” では真に徹底している。field Negro は常に‘無智で, 汚らしく’, 故に‘見下げた’奴らであり, Nat の態度は終生変らない。“Gray’s” の Nat はなるほど孤独な, 非社交的な性格の持主であるが, 同じ黒人に蔑視や憎悪を感じる箇所はない。その結果, 先の自由への強い欲求の欠如に加え, すべての黒人の解放を目的とするための前提が成立しないために, 叛乱の大義がそこにもろくも崩れ去ってしまうのである。

“Styron’s” の Nat は神の啓示によってじよじよに暴動へと心理的に引きずられてゆくが, それを推進する必然的な動機がないので作品の盛り上がりには欠ける。Ⅲ章になって, ‘During the four or five years approaching 1831, when it had become first my obsession and then my acceptance of a divine

mission to kill all the white people in Southampton...’ (p. 259) と憎しみゆえの皆殺しを決意する。彼の使命観を支えるものは旧約聖書の Ezekiel のことばである ‘Slay utterly old and young, both maids and little children, and women ...’ (p. 52) “Styron’s” の暴動の主要動機は、他の何よりも白人への憎しみであるが、“Gray’s” では白人に対しても憎しみのことばは出て来ない。両者の大きな相違点である。Nat は殺害の目的を “He [Nat Turner] says that indiscriminate massacre was not their intention after they obtained foothold, and was resorted to in the first instance to strike terror and alarm.” (“Rebellion” p. 47) と語っているが、“Gray’s” では、逃げられて人に知らされるのを防ぐためと、もう一つは、‘carry terror and devastation wherever we went ...’ といっている。“Styron’s” の場合は奴隷制度へ向けられた憤りではなく、不当な扱いをする白人へ向けた私憤、憎悪に根ざした復讐なのである。‘Like his mother he [a boy called Putnam] was destined to have his head separated from his neck — quite a penalty to pay, it might be thought, for calling me “the nigger” so longtime ... (p. 274). 皆殺し計画に加わった仲間たち、妻子を売られた Nelson と Hark, 少年時代に overseer になぐられて耳が聞こえなくなった Henry, 苛酷な主人にこき使われる Sam, 今の主人に恨みはないが殺すのなら喜んでしようという Austin と、“Styron’s” の人物は殺人を目的にし、その結果得られる自由はむしろその副産物という書き方であるから、‘...both of them ... were capable, in their own longnourished hatred and rage, of licing the liver out of a white man with as litle qualmor conscience as if they werereg utting a rabbit or a pig.’ (p. 333) というふうにも描けるのである。したがって殺人のシーンが残酷になるのは必然の成行きとなる。Nat の主人 Joseph Travis の殺人に焦点を合わせ比較すると、“Gray’s” は、‘... I could not give a death blow, the hatchet glanced from his head, he sprang from the bed and called his wife, it was his last word, Will laid him dead, with

a blow of his axe...' "Styron's" は, '... and it was at that instant that Travis's head, gushing blood from a matrix of pulpy crimson flesh, rolled from his neck and fell to the floor with a single bounce, then lay still... Blood deluged room in a foaming sacrament.' (p. 390) もっとも "Gray's" も事件の判決資料としての役割上, 殺害の様子を逐一のべている。その描写は簡潔ではあるが, 事実の重みのためか, かえってそのために凄絶さを抱かせるところもある。叛乱や暴動は本来こうした残酷さをともなうものであるが, 作者はくり返し鮮血のほとばしる情景, ひどい仕打ちで死体を汚したりする場面(そのすぐあとで 'It was because of you, old woman, that we did not learn to fight nobly...' (p. 397) などと云わせている)を提示する。著者のいう「旧約的な残忍」の試み(「英語青年」1968年8月号 p. 51)はこのあたりを指しているのであろう。Styron は前作の *Set This House on Fire* のなかで Kinsoling をして「私の見る悪夢の半分は黒人とむすびついている。南部の白人ならば, だれでもそういう悪夢を見たことがあるにちがいない」(「英語青年」1968年8月号 p. 29)といわせているが, 白人の深層意識の罪悪感がこのおぞましい幻想の世界を生み出すのであろうか。

現実の Nat は T. Trezvant という人の手紙では, 'He acknowledge himself a coward ... he acknowledges now that the revelation was misinterpreted by him ... he is now convinced that he has done wrong, and advises all other Negroes to follow his example.' ("Rebellion" p. 43) で, "Styron's" の描く Nat 像と完全に一致する。"Gray's" の Nat からはちよっと想像できない姿であるが, Apthekeer は捕縛後の圧力によるかも知れないといいながらもこの説を否定している。"Styron's" の Nat は確固たる信念がないので決起の前からすでに不安と恐怖におそわれる。'Cease the War, cease the war, my heart howled, Run, run, cried my soul. At that moment my fear was so great that I felt that I was even beyond reach or counsel of the Lord.' (p. 382) 暗さのせいで主人 Travis に最後の一撃を加えられず, Mrs.

Newsome にも頭に数撃を加えたが殺せない“Gray’s”の Nat は、“Styron’s”では臆病と慈悲心から人が殺せないで Will の軽蔑をかい、あやうく指揮権を失いかける。“Styron’s”の牢獄の Nat は、すっかり神から見放されて絶望感に包まれ、死の恐怖にふるえる哀れな小羊である。Ⅱでのべた‘黒人少年が砂の中へ沈む’イルージョンに見られるように犯した罪にもおびえている。Gray に罪を追及され、‘Maybe he [Gray] is right, I thought, maybe all was for nothing, maybe worse than nothing, and all I’ve done was evil in the sight of God.’ (p. 115) と煩悶する。作者のいう「旧約の残忍」と一対をなす「新約の慈悲」（『英語青年』1968年8月号 p. 51）へ至る道程として、この実存主義的な懐疑と不安は必要なのかも知れないが、読者に対しこのような Nat 像からいかなる「歴史に関する省察」を汲み取れというのであろうか。“Styron’s”の Nat は史実に極めて即しているように見えながら、実はその本質において似ても似つかない人物にでき上がっている。

しばらく主人公を離れ、同志のなかから特に目立った Will の例を上げよう。“Gray’s”によると、決起の夜 Nat が集合場所へ行くとこの男が来ているので、‘... asked Will how came he there, he answered, his life was worth no more than others, and his liberty as dear to him. I asked him if he thought to obtain it? He said he would, or lose his life. This was enough to put him in full confidence.’ 生命を自由に賭する覚悟は明らかである。そして計7人を殺害したことになるが、そのためであろうか、“Styron’s”の Will は奴隷主から加えられた責苦のためすべての人間を呪い憎しむけだもののような蛮人である。‘... I [Nat] know from hearsay that he broods constantly upon rape, the despoliation of white women masters his dreams, night and day.’ (p. 102), ‘I [Will] gwine git me some meat now — *white* meat.’ といわせ、強姦、殺人をほしいままにする。掠奪行為については、その行為の目的は不明であるが、Nat と分れた一隊が金銭やその他の貴重品（その額も不明）を奪ったことは“Gray’s”, と “Rebellion”

とも認めているが、強姦は“Rebellion”によると、その証拠は見られなかったという結論を出している。そして Howison という人の言として、“Remembering the brutal passion of the negro, we can only account for this fact by supposing the actors have been appalled by the very success of their enterprise.”と奇妙な解釈を紹介しているが、このような考え方は白人が黒人に関して抱く‘神話’の一つである。Styron 自身も、黒人は白人女性にあこがれ、関係を持ちたがっているという性の迷妄に取りつかれているようである。IIでのべたように Natの自慰行為には常に白人女が頭に浮かび、主家の娘 Emmeline に欲情を感じ、さらに突発的に Major Thomas Ridly の婚約者の娘にもはげしく欲望を感じる。これに反し、黒人女のことを思い浮かべるのは決起前の一度きりである。作者は Nat にはっきりと云わせている。‘In later life, of course, I learned that such an infatuation for a beautiful white mistress on the part of a black boy was not at all uncommon, despite the possibility of danger ...’ (p. 178)

そのほかに、IIでのべた Nat と Margaret との関係がある。天使の如くやさしい理想的な娘 Margaret は非人道的な奴隷制にも反対する数少ない一人で、Nat を話の分る好ましい‘darky’と思っているが、Nat は身分不相応な慕情を寄せる。“Gray’s”によると、やはり Margaret という女だけを Nat は殺したことになっているが、殺害の事実以外はむしろ Styron の創作である。“Styron’s”は聖書への言及、聖書からの引用であふれていて、一つの宗教物語としての読み取りを読者に迫っていることは否定できない。Styron の状況設定は Nat をして地上最愛の Margaret のみを殺す運命に沈ませ、ふたたび奴隷に生まれるなら、今度はすべての人間を殺し、彼女だけを救うのだと絶叫させる。死刑前に彼女への嵐のような欲情に身を投げたすえ、やっと神を見出して、霊と肉の拮抗は終わりを告げ、Nat 自身は救済されるというのである。また作者の教訓は、奴隷と乙女の物語を通して、愛と憎しみの相関関係を人種問題に訴えようとしているようである。Margaretを

なつかしむ Nat の語り口のリリズムは、暗い牢獄の中での回想のゆえに一層悲劇感を高め、ある部分では Virginia の景物と混然と融合し、読者を感動に誘うことは事実である。けれどもその感動は“Gone with the Wind”のそれと同種のものである。

“Styron’s” の Nat が Margaret を始め白人女性に対し、あまりにも自己を卑下した niggerism はどこから来るのであろうか。こんな描写がある。

‘Solitary and sovereign as I gazed down upon this wrecked backwater of time, I suddenly felt myself its possessor; in a twinkling I became white — white as clabber cheese, white, stark white, white as a marble Episcopalian ... what a strange, demented ecstasy! How white I was! What wicked joy! But my blackness immediately returned ... (p. 232)

また同志の一人 Sam は mulatto で、作者によると、頭が良くそれに色が白いために多くの黒人の尊敬を受け、そのため暴動の際、参加が増えるだろうと Nat は考えている。主人公が幾度も夢見る岬の真白い塔（実は作者が幼少年期を過ごした Norfolk の海岸風景らしい）は、黒人の潜在意識のなかの‘白’へのあこがれと解すべきなのであろうか。

こうした作者の意識は‘黒人’を指す呼称にも顕著に表われており、恐らく現代黒人作家たちが自らを指す言葉と比較すれば、対照が鮮かになるであろう。黒人が忌避する nigger や darky が頻繁に使われているが、奴隷所有主が Nat に向かって ‘I wish you didn’t have to go back. You’re the handiest youngdarky anywhere around.’ (p. 325) というのは当然としても、Nat 自身がのべて来たような人物であるから、自己を卑下し、自己を憐れみ、‘... put her [Emmeline] mind was on anything but a nigger boy ...’ (p. 178), ‘At such moments despite myself, the bloodshame I felt at being a nigger also, was as sharp as a sword through my guts.’ (p. 184) などという類のところは随所に見受けられる。前述の house Negro を house nigger というのも同類であろう。‘... they straggled along in a single line, men,

women, pickaninnies, prepared to receive their gifts —' (p. 174), '... a skinn yundersized pickaninny in a starched white jumper.' (p. 120) などが Nat 自身の口から平気で飛び出して来る。

“Styron's” の黒人の劣等性の摘発は Gray, 及び奴隷所有者たちが激越に展開しているところであるが、その反撥や反論は Nat からも、黒白を問わず他の人物からもなされない。それゆえ Nat が市場のそばや、その他の場所で、たまさか黒人たちに向って、黒い皮膚の美しさを愛せよなどと説教を聞かせても空虚にひびくのはやむをえないことである。Styron の意識は Proslavery 的な観点に立つ奴隷主の側にあるため、黒人で奴隷である人物の内面の世界の真実を抽出しようとする試みは、そもそも無理があったようである。特に第一人小説の形を選んだことは、作者の野心にもかかわらず、さまざまな矛盾が拒絶反応の如く現われ、identity 不明の主人公ができて上がっている。

IV

作者は序文で、本書は歴史小説ではない、と表明している。歴史小説について論ずるには、歴史小説とは何か、という定義から始めねばならないが、紙面の制約でその余裕もない。常識的な意味では、この実名モデル小説は、筆者が見てきたようにそう規定する具体的な事例にことを欠かないであろう。当然読者も歴史小説として読み取るに違いはあるまい。その読み方にしたがえば、Nat Turner の史実からそれた部分において、また‘叛乱の動機など’ Nat について知られざる部分においても、‘想像力を駆使した’結果誕生した、新しい、現代的な虚像 Nat Turner は、「歴史に関する省察である作品を生み出す」作者の意図にかかわらず、かえって結果的に歴史へのゆがんだ省察を生み出す危険性にあふれている、と云わざるをえない。恐らく作者のもっとも危惧している点であろうが、歴史的な事実から逸脱しているからといって、作者を責めるつもりはない。そのために、芸術的作品の価値はいささかも損

なわれることがあってはならない。価値はどこまでも、その作品の文学的眞実によって判断すべき性質のものであるが、Styron の場合は、Nat Turner に関するすでに知られている事実が、かえって、非常な障害として、作者と文学的眞実との間に立ちはだかり、それが大きな制約として働いたことは否定できない。

Styron の *The Confession of Nat Turner* について書かれた記事・論文のうち、筆者の目にとまったものを挙げると、アメリカの雑誌では、“New-week,” (October 15, 1967) “Harper’s” (September, 1967), “Nation” (April 22, 1968), “Freedomways” (by Loyle Hairston, Winter, 1968, by Ossie Davis, Summer, 1968), 日本では、「英語研究」(渥美昭夫, 1968年1月号, 「英語青年」(須山静夫, 及び ‘Home & Foreign News,’ 1968年8月号) である。また筆者の手許に届いていないが、最近単行本で、作家・歴史家たちの批判を集めた *William Styron’s Nat Turner — Ten Black Writer’s Respond* と、黒人作家の小説による新たなアプローチ *Ol’ Prophet Nat* が最近出版されたことを附記しておく。(1968. 11. 15)